

平成29年度助成研究の概要

厚生労働省など、国の機関及び公益法人などの公募により採択された研究です。本年度は、神奈川県公衆衛生協会「調査研究助成」1課題、公益財団法人 大同生命厚生事業団「地域保健福祉研究助成」2課題を実施しています。

神奈川県公衆衛生協会「調査研究助成」

No.	研究員	所属	研究課題(概要)
1	田坂 雅子	企画情報部 衛生情報課	<p>県内感染症対策における感染症担当者の人材育成へのとりくみ</p> <p>背景として、2019年ラグビーワールドカップ、2020年東京オリンピック・パラリンピック等の国際行事があり、マスクやザリリングを控えている。多くの人が訪日し、海外からの感染症の流入リスクが高くなることが想定されるため、平時の感染症発生動向を正しく把握する必要がある。</p> <p>また、県域担当者への専門的機能研修等が少なく、人材育成の強化が必要と考えられる。そこで、研修会等を開催し、担当者のレベルアップを図り、迅速で的確な業務遂行により、感染症・結核対策を強化することを目的とした。</p>

公益財団法人 大同生命厚生事業団「地域保健福祉研究助成」

No.	研究員	所属	研究課題(概要)
1	大屋日登美	微生物部 細菌・環境生物G	<p>薬剤耐性肺炎マイコプラズマと分子疫学に関する研究(H28.9~H29.8)</p> <p>マイコプラズマ肺炎の治療には、マクロライド系(MLs)薬剤が第一選択薬剤として用いられるが、MLsに高度耐性を示すMLs耐性肺炎マイコプラズマの増加に伴い、成人ではニューキノロン系(FQs)の薬剤が治療に汎用されるようになった。小児科領域では、MLsにかわる薬剤として副作用のあるテトラサイクリン系の使用には問題があり、また、使用可能なFQs薬剤が限られている。このため、成人領域でFQs耐性肺炎マイコプラズマが出現し、小児領域に拡散することは臨床で大きな問題となる。そこで、未だ臨床から分離されていないFQs耐性菌を探索するため、臨床分離株の薬剤感受性試験を実施したところ、未だ耐性菌は出現していなかった。FQs耐性菌出現の可能性を実験的に確認し、実験由来FQs耐性菌の耐性機構を解析するとともに、耐性菌の特徴を捉えることにより出現・増加を防ぐ対策を探る。</p>
2	陳内 理生	微生物部 細菌・環境生物G	<p>薬剤耐性髄膜炎菌の発生・伝播機構に関する分子疫学的研究(H29.9~H30.8)</p> <p>先行研究により平成23年度から平成28年度にかけて、大阪府において保菌者由来の髄膜炎菌を収集し、薬剤感受性および血清型別試験を実施した結果、平成27年からペニシリン中等度耐性株、ニューキノロン耐性株および血清型別不能株が急激に増加していることが明らかとなった。本研究では、髄膜炎菌における薬剤耐性の伝播機構の解明を目的として、得られた菌株のDNAを使用し、Multi Locus Sequence Type(MLST)法による遺伝子解析を試みた。その結果、これらに日本土着の菌株が含まれていることが明らかとなった。しかし、海外から移入した菌株から日本土着の菌株に耐性に関わる遺伝子が伝播したのか、土着の菌株が変異し薬剤耐性を獲得したのかなど、薬剤耐性化機構は明らかとなっておらず、今後さらなる解析を行う予定である。</p>